

伝統芸能再生の時代

「音楽指導要領の改訂」下での音楽教育も2年度目を迎え、様々な取り組みが学校で行われています。幕末明治以来、西欧クラシック音楽を優先的に教育してきた日本の音楽教育の根幹部分での変更は、5年もすれば若者の音楽意識に大きな影響を与えることになるのは確実です。新しい文化変容はどんな展開を見せるのか楽しみです。現在進行している時代の変化を受けた企画の工夫、考え方の一端をお届けします。

「沖縄発 三弦三昧」をプロデュースして

～公共ホールの新たなる展開を考える～

伝統芸能プロデューサー 有限会社 古典空間 代表取締役

小野木 豊昭 Onogi Toyoaki

現在、和太鼓や三味線など日本の伝統的な楽器やその演奏者たちに熱いスポットがあたっている。中でも津軽三味線は、その迫力、スピード感、そして若い演奏者による自由な展開で人気を集めているが、そんな津軽三味線のルーツは、沖縄の三線^{さんしん}であり、さらに中国の三弦に遡ることができる。誕生は明治以降とされ数ある三味線の中で最も歴史の新しい津軽三味線と、ルーツである中国三弦が、中間点の沖縄で出会う。

中国 沖縄 日本 その文化的系譜を代表する3本弦の撥弦楽器が一堂に会する企画公演、アサヒビール音楽キャラバン「沖縄発 三弦三昧」アサヒビール(株)が企業メセナの一環で行ってきた旧称アサヒビール音楽講座の第6回目にあたる公演が2001年12月、沖縄をステージにスタートを切った。そして、沖縄の皆さんと共につくり上げた公演は、各公演ともテレビ・新聞など様々なメディアでも取り上げられ大評判、大好評のうちに終了することができた。

伝統芸能、そのエンターテインメントとしての 再生

中国三弦(大三弦)の第一人者、費堅蓉(フェイス・ジン)が超絶技巧と豊かな音楽性で古典曲「辺寨之夜」等オリジナル曲を披露した後、新良幸人の登場。沖縄を代表する役者・演出家で沖縄市芸術監督・玉城満の軽妙な司会で、楽器の比較(写真)そして競演。息詰まるフリーセッション。楽器で“会話”する二人に会場が沸く。新良幸人が相棒のサンデー(島太鼓)を呼び入れ「月ぬ美しゃ」等の民謡を唄う。八重山民謡を現代的センスで披露する彼が三線のソコ楽器としての可能性と、民謡だけでなく琉球舞踊の伴奏楽器として活躍する三線の一面を、若手舞踊家のホープ、志田真木とのコラボレーションを

通して披露。志田房子師の振付が華を添える。新良幸人と津軽三味線のあんみ通(安仲由佳、金田一公美)の競演の後が彼女たちのコーナー。明るいキャラクターと「津軽じょんから節」「秋田音頭」等のパワー溢れる演奏が場内を魅了。言葉による解説ではなく、リレー形式の構成で楽器の変遷を表現してみた。そして圧巻は、最後にメンバー全員による火花が散るようなセッション。

彼らの体の中にインプットされているのは、いわゆる共通言語としての「五線譜」ではない。さらに、楽器学上同じスパイクリュートの撥弦楽器として「血が濃い」からこそ演奏者にとって技術的にも困難な擦り合わせだったはずだ。五本の指を駆使する、爪を使う、バチを使う……奏法もまったく異なる。それぞれに完成された音楽的展開があるのだ。普段はそれぞれ自らの世界をもって活躍しているアーティストたちであり、通常ならば同じステージに上がることはまずない。

そんな様々な関門をくぐり抜け、芸能には厳しい沖縄の皆さんからも万雷の拍手をいただくことのできた背景には、この公演を「博物館的三弦陳列公演」に終わらせることなく「三弦の新たなる可能性の追求」そして「受け継いだ技術や表現の単なる再現」に終始することのないエンターテインメント&アートとしての「再生」という現代と未来を視座に据えた出演者間の共通認識と高度な技術力があつたからに他ならない。さらに今公演のコンセプトと出演者の思いを理解し支え続けた、技術及び制作スタッフ、各自治体関係者の熱意も忘れることはできない。

企画の展開、そして向かうべき“着地点”

2001年12月7日、沖縄市・沖縄市民小劇場「あしびなー」を皮切りに、翌2002年3月27日、石垣市・石



中国三弦と沖縄の三線とを比較する



那覇市パレット市民劇場公演にて出演者
勢揃いしてのスナップ
(2002年3月29日)
左から、玉城満(司会)、志田真木(琉球舞踊)、
金田一公美(唄・津軽三味線/あんみ通)、
安仲由佳(津軽三味線/あんみ通)、
新良幸人(唄・三線)、費堅葵(中国三弦)、
サンデー(島太鼓)

垣市民会館、29日那覇市・パレット市民劇場の三公演が沖縄県公文協のネットワーク事業として行われた。そして「沖縄発～」の意味が現実のものとなった東京公演が7月18日、赤坂の国際交流基金フォーラムで実現、さらに9月には出演者が主要メンバーとして参加し、天津、北京、上海、南京、広州等中国各地を巡演した「邦楽・中国公演(国際交流基金主催事業、日中国交正常化30周年記念事業)と、国際交流にまで至る展開へと飛躍し、2003年3月19日には愛媛県に存在する歴史的な芝居小屋・内子座(内子町役場町並地域振興課運営)における公演と、内容的な進化をともないつつ着実に公演数を重ねることができた。

この企画を進めるにあたり、アサヒビール芸術文化財団事務局長の加藤種男氏(当時同社環境社会貢献部部長)よりいただいた命題は、異ジャンルの演奏者たちによるコラボレーションにより、今までになかった全く新しい音楽、及び音楽空間を創り出すこと。各地域で地

元の人たちと共につくり、そこから新しい文化を発信してゆく。つまり、東京からの文化の一方通行、都市への文化の一極集中の傾向にクサビを打ち込むこと、であった。

沖縄市における公演の約半年前から、できる限り沖縄を訪問し、沖縄の音楽・文化シーンに触れることになる。様々なCDを聴き、数多くのコンサートやライブに足を運び、新良幸人氏に出会った。卓越した三線の技量と唄の表現力、何より伝統をベースにしつつも今という時代のフィルターを通してイキイキと「音楽する」姿勢に、中国、沖縄、津軽 というジャンルを超えた音楽づくりに向かって最良のパートナーを得た思いであった。

また、特にこの命題は、制作会社として活動する私たちが、日頃各地域の自治体の皆さんとのお付き合いを通して訴え続けてきたことでもあり、各地域の文化行政の目指すべき一つの着地点でもあると考えており、大いに共感できた。1998年12月発行の本誌第8号に掲載いただいた拙稿「公共ホールと共にプロデュースする伝統芸能」の



アサヒビール音楽キャラバン「沖縄発 三弦三味」公演チラシ

「沖縄発～」東京行きが実現した国際交流基金フォーラムにおける公演 全員によるフィナーレ風景(2002年7月18日 写真/二階堂健)

中で、「……厳しい予算枠の中で、集客・採算ともにある程度の結果を残すことができる企画を年間何本も行わなければならない事情は、様々なホールの皆様とのお付き合いの中から重々認識しているつもりだ。(中略)ただ、企画を売り買いするだけの関係ではなく、ホールと企画会社が共に練り上げてゆくかたち、これこそ21世紀に向けての公共ホールのあり方ではないかと確信している」という文を寄せた。様々な試みを実践し地域の「顔」として機能しているホールも増えつつある一方、5年を経た現在でもこのメッセージが生き続けている現実も否定できない。「言うは易し」の理想論と云ってしまえばそれまでだが、公共ホールが直面している現実を乗り越える術として、たとえば、単館では困難な事業も、ホール間のネットワーク事業や企業メセナとの連携により、具現化することができ、さらなる地域の発信型文化活動の展開や地域の活性化へ貢献するという構図 日頃の思いに対する最高の実践の場を与えていただいたと実感した。

カギになる地元の皆さんとのコラボレーション

沖縄を訪れるたびに素晴らしい自然と泡盛を堪能しつつも、それ以上に感動したことは、この地が「食べて、飲んで、着て、住んで」の延長に「弾いて、唄って、踊って」がある土地柄であり、舞踊や民謡を当たり前の日常生活や文化活動に取り込んでいる伝統があるということだった。沖縄の皆さんにとって、発表の場として公共ホールの果たしている役割の重要性を強く感じた。ところで、地元のホールが単なる発表の場としての機能だけではなく、その土地その地域のニーズに即した文化を発信し、地域活性化の

要となることが求められて久しい。今回の企業メセナ活動の理念との融合にふさわしいと考え、「共につくり出し、新しい文化を発信してゆく」パートナーとして沖縄県の公文協の皆さんにお声をかけた。そして、沖縄市民小劇場の照屋幹夫氏(現沖縄市文化観光課)との出会い。氏の柔軟かつポジティブなナビゲートにより沖縄市、那覇市、石垣市とのネットワーク化が実現した。また、年度末多忙のなかストリートライブを仕組むなど、集客活動に懸命に奔走する各市文化事業担当の皆さんのモチベーションの高さも公演成功に向かってのカギであった。

「各地域から都市(東京)へ」というベクトルづくりに向けて、チラシ・ポスターの作成から舞台・音響・照明のスタッフに至るまで「メイドイン沖縄」にこだわった。特にスタッフの皆さんの活躍は目を見張るものがあり、東京公演、内子座公演においても、公演のコンセプトを日本のスタッフに明確に伝えつつ、舞台裏においても見事なコラボレーションを展開して下さった。このプロジェクトに関わる全ての皆さんが「沖縄発～」の意義を現在に至るまで共有し続けていることの価値ははかり知れない。

アサヒビール音楽キャラバン「沖縄発 三弦三味」のプロデュースの実践は、公共ホールの事業展開のあり方について様々な模索が続く中で、自治体と企業メセナとの関わり方における新たな方向性を見出すことのできた素晴らしい機会でもあった。そして何より、この両者のタイアップが「伝統芸能をエンターテインメントかつアートとしてイキイキと現代に甦らせる」という着地点を目指す私たちにとって「偉大なるサポーター」たり得たことは、かけがえのない事実である。